

無料体験版一淫泳教室

白むち、美人キャスター

セミダブルのベッドの上に投げ出された全裸の女体。気死した彼女は二度目の射精を顔面に受けて、その白むちの瓜実顔をきらきらと輝かせているのだ。ややソバージュのかかった背中まである黒髪はバサバサに跳ね上がって格闘の凄まじさを物語り、冴えた知性を思わせる額や切れ長の瞳を閉じた瞼、しもぶくれの頬、そして小粒な歯並びをかすかに覗かせる肉感的な唇のまわりといった美貌の造作へと、大量のザーメンを糊としてそのほつれ毛を貼りつけている。両手を中途半端な万歳の感じにあげ、汗ばんだ腋窩を曝し、呼吸にうっすらと上下する乳ぶさ、それに小さな臍を窪ませた下腹もまったく無防備に開いている。開いているのはそこだけでなく、両肢もまた同じである。この女の下肢はスラリとしてスプリンターのそれのようだったが、それもまた滑稽なほどO脚の格好になっている。だから、むっちり引き締まった太腿のつけ根の陰部はあらわであった。激烈に衝きまくられたらしいそこはかなり形を崩している。上の顔からは想像できないほどに色素が沈着して豊かな性体験を彷彿とさせる淫乱な爛れボボだ。一度目の射精は腔内に

噴出されたらしく、まだ漏排の残滓をそこここにカサつかせていた。

こんなはしたないザマの西田夏子をこうして眺められるのは、日本広しといえどもこの俺様だけだろうと、ベッドの上に仁王立ちになって彼女を見下ろしている小城啄治はいつもながら勝利感に酔い痴れている。彼もまた全裸。赤銅色の鍛えられた肉体は逆三角形型の理想的な男性美をつくっている。股間の一物は二度の放出にもかかわらず隆々とした偉容をそそりたたせている。

肉体だけでなくマスクもなかなかの精悍さを誇っていた。それこそ男性モデル並みの彫りの深さと甘さも備えている。外見だけではなくて彼はまた頭脳の方も一筋縄ではいかぬ切れを持っているのだった。中退したとはいえ、大学は一流、海外留学の経験もあるようだし、語り口爽やかにして話題は豊富。ユーモアのセンスに溢れ……とまるでホストクラブの採用条件を書きつらねているような感じなのだが、むろん、そうでなければ西田夏子のような女がスイミングスクールのインストラクター如きに隙を見せるはずもないのである。そして世を欺く仮面の下に、冷酷で卑劣で下品で猟色を好む、真の顔が隠されていたからこそ、ここ二三ヵ月、このブラウン管を賑わす才色兼備の美人キャスターはセックス奴隷としてしごかれ扱われ、言語を絶する生地獄を味わわされているのだった。

「お夏っ、いつまでノビてやがる。オ×××で気をやった後は感謝の言葉をいわなきゃならんのだろうがっ」

ドスのきいた声とヤクザまがいの台詞……啄治の甘いマスクと到底結びつかないものなのだが、かえって恐ろしげな迫力を感じさせる。

「こいつ、狸寝入りして誤魔化そうたって、そうは問屋はおろさねえ。この啄治様の眼は節穴じゃねえんだぞ！」

啄治は片足で夏子の胸をふみにじった。弾力に富むDカップバスト。仰向けになっているのに潰れもせず、ハの字にも流れず、ツンとトップを上向かせて紡錘形を保っている。

啄治は足裏に感じるフランスパンのような弾力を楽しみながらギュッと押し潰し、桃色の乳暈の中央の可憐なゴム質の突起を足指に挟んでは擗るのであった。

「うう……」

ようやく息を吹き返した夏子は毛穴の開き切っていた頬に血色を蘇らせて、黒い瞳を半眼に覗かせた。

「やい、白むちっ。啄治様のザーメン、その小生意気な鼻面に浴びて、どんな気持ちなのかいってみやがれってんだ！」

荒々しく足を踏みこみ、啄治は毒突く。容赦なく体重をかけるものだから乳ぶさの肉が彼の足の両サイドから餡のようにはみ出してしまう。

「痛ッ……やめてよ……」

先程まで抵抗と随喜の咆哮をあげていた彼女の声は擦れている。これ以上、喚きたてれば完全に喉が潰れて、今夜のニュース原稿はハスキーな声で読まなければならなくなる。夏子は自分の胸に置かれた悪魔の片足をどけようと両手を添えるのだったが、それは鋼鉄のように硬くてとても彼女の力では無理だ。艶やかなピンク色のマニキュアをつけたほっそりした指がチクチクと剛毛に絡むばかりである。

「白むち、なんだその反抗的な目つきは。またぞろ鉄火の蟲が騒いできたってのか。ケッ、お前がどんなに気張ろうと、もうコレからは逃げられないんだってこと、まだわからねえのかよ」

と、啄治は自分の半勃起状態のデカ魔羅を揺すりたてた。先端からザーメン飛び出して夏子の胸もとに落ちた。コレとはもちろんこれ、である。

夏子は下唇を噛み、憎悪の眼差しで啄治を見上げる。

「ハハーン、読めたぞ。二度くらいじゃお夏はもう満足できないってわけだな。三度四度と姦されなきゃ感謝の気持ちも沸いてこないってな」

啄治はニヤリと笑うと乳ぶさを踏み躪っていた足を今度は彼女の薄く肋骨の浮いた脇腹に差しこんで一気に俯せに引っ繰り返した。啄治の強靱な力の前では、女など軽々とあしらわれてしまう。水泳ばかりでなく何か他の

スポーツでも鍛えているに違いない。

夏子の色白の素敵な背中。肩甲骨が綺麗に浮きだし、なおやかな背筋がずっと走っている。腰のくびれからよく発達した腰部が盛り上がる。女盛りに踏みこんだばかりの丸い尻。割れ目がくっきりとするほど尻梁が高く、肉の垂れなどはみられない。

啄治はその尻に足を置いてグイグイと押すのである。

「しかしだな。お夏。お前がそういう淫売の料簡を持っていてもだ。こっちはお前のその腐れxxx、二度でも辟易としているんだ。ゲップが出るんだよ」

「……だったら早く帰してよっ」

シーツに伏せた顔の下で夏子は精一杯の強がりをつた。もちろん啄治が許すはずもない。なんだとオ！ と一喝すると彼女の後頭部を力任せに踏みつけた。

「ンググッ——」

ベッドに沈みこむほどの圧力に美人キャスターの癖のない鼻が押し潰れ、呻きもくぐもる。苦しげに両足をバタつかせ、手はシーツを握る。

「俺がいいたいのはだな。前は飽きたから、今度はオカマを掘ってやろうかってことだ。毎朝糞をヒリ出しているてめえのケツの穴にだよ！」

「いやあっ」

必死に首をねじり、シーツと啄治の足裏の間で横顔を向けた夏子はむくれだした頬の肉に口も鼻も眼もクシャ

クシャにされながら叫ぶのだ。

「フフフ、そう嫌うなって。この間、やってやった時なんか、椅子に坐っているのも辛そうなくらいに喜んでいたじゃないか、え？」

啄治が知っているのは、肛交直後のオンエアの際に余りの痛さにどうしてもまともに坐っていられず、何度も腰の位置を変えていた姿がそのまま全国に流れてしまい、暇な視聴者から西田夏子はどうしたのかと電話が殺到した事件をさしているのである。もう一度赤っ恥を搔きたいのか、と。なにしろ高視聴率を続けている番組だし、夏子の人気も高いのでちょっとした変化に対する反応も大きかった。

「お尻は懲り懲りよ」

夏子は顔を紅潮させて叫ぶ。

「じゃ、ファックはもう充分だというんだな？」

グリグリと圧迫された顔をで頷く夏子。

「それなら感謝の言葉を口にしないわけにはいかんだろうさ。あんな大声あげてヨガッて失神したくせに、そのまま帰ろうだなんていう行儀の悪さは、俺の女には許されねえんだ」

と、啄治は彼女の顔から足を外し、その足の爪先で背筋をなぞりながら続ける。

「いつまでも説教しなきゃならんようじゃ、しょうがないだろ、お夏」

「……」

どうしてこんな男に勝手放題弄ばれなければならないのか、夏子は悔し涙をボロボロとシーツにこぼした。しかし啄治の爪先がスーッ、スーッと彼女の鋭い感受性が集中している背筋からうなじへと擦りあげてくると、嗚咽も滞りがちになってしまう。もはや夏子の一部始終は啄治に調べ切られていた。小さな黒子の位置までも彼は熟知している。変質的なこの男はそれを白地図のような人体図に書きこみ、密会のたびに見せたりする。黒子は青い点で印され、性感帯は赤い点だ。赤い点は胸や跨ぐらに集中しているわけだが、背面図にもたっぷりと記入されている。

足の指で淫撫される屈辱に顔を真っ赤にしながら、夏子の頭に卑劣なその人体図が浮かんできている。赤い点を見事とっていいほど外さない啄治の淫技……夏子は激しく首を振って脳の淫猥な薄靄を振り切ろうとする。

「何が気鋭の女性キャスターだよ。ただの淫売じゃねえか。足の指で背中触られただけで、鼻の穴おっぴろげて助平な表情してやがる。変態女なんだよ、お前はっ。オラ、牝の口のきき方してみねえか！」

白むちっ、と再び罵られ、夏子は枕に顔を埋めながら、観念したように口を開く。

「……わたくし、西田夏子27歳は小城啄治様の尊い精液をオ×××と白むちの顔にお受けできてこんなに幸せ

なことはございません。本当にお有難うございます」

気も狂うほどの肉交の後にはいつも強要される言葉だが、あまりにも馬鹿馬鹿しくて、情けなくて、夏子はつい不貞腐れたように早口になってしまう。それがまた啄治様の怒りを買うハメになった。

「馬鹿野郎！ そんな色気もそっけもねえ調子でどうするんだっ」

ゴツンと頭のとっぺんを拳骨で殴ると啄治はそのまま夏子の臀部の上に腰を下ろしてしまう。さらに嫌がる夏子の片腕を掴んで背中へねじりあげた。

「あっ……」

高く腕を決めつけられる苦痛に夏子は顔を仰け反らせて呻いた。これが啄治がただのスケコマシではない証明だ。セックスが絶倫なのはもちろん、激しい暴力で女を虐めぬくのを楽しみにしているサチストである。

しっかりと骨身にしみている夏子はいつもはそれを恐れてすぐに屈服するのであるが、今日は虫の居所が悪かったのか、カァーッと頭に血が昇ったらしく、

「いうわよっ。いえばいいんでしょう」

と、吐き捨てる次のようにいうのだった。

「わたくし西田夏子は『豚』治様の小汚いザーメンをかけられたけがらわしいスベタでございます。こんなスベタにお似合いの下劣な男は世界中でやっぱりあなた様しかおりません。どうか末長く、その臭いチ×××で夏子

を愛してくださいませ。どう？ これで気が済んだ？
おいはぎ豚治様！」

夏子はこちらを振り向いて昂奮に火照った顔を見せた。その瞳の凄絶な美しさときたらどうだろう。気の強い夏子のヒステリーは今日に始まったものではないので驚きもしない。いや、かえってたまには反抗してくれたほうが新鮮で刺戟的といえる。不貞腐れた屈従の表情より、こうして火のような反抗の表情こそ、この女の美貌には似合うのである。やはりアナウンサーから美貌だけを買われてキャスターになったのではなく、政治部記者から転出してきた経歴が示すとおり、本物のジャーナリストの体質が彼女にはあるからだろうか。不正や抑圧を憎む気持ちが植えつけられているに違いなかった。

強情、跳ねっ返り、ジャジャ馬、鉄火、生意気、お転婆……ああ、そんな女こそ、小城啄治にとっては目一杯のサチズムを駆り立ててくれる女なのだった。

「なんだとお、てめえ」

ゆるみそうになる表情をことさら吊り上げて啄治は烈火の如く怒るのである。腰の一物が再び天井へ向ってそそりたちはじめた。自分の嗜好は嗜好としてこの啄治様の女のくせに反逆をあらわにする行儀を許すわけにはいかない。こってりと懲らしめてぐうの音も出せないようにヤキを入れてやろう。

夏子の細腕をいっそう高くねじり上げて、きつく睨み

つけていた彼女の顔をはっきりとベッドに伏せさせる。

「いい度胸してるじゃねえか。さすがは闘う女性キャスターだよ。ただの可愛い子ちゃんアナウンサーとは違うよ。それは認めてやる。しかし俺の女になったからには粗相は許されねえんだよ！」

「馬鹿いわないでっ。私はあなたの女じゃないわよ。レイプされて、脅されて、それで無理矢理つき合わされているんじゃないっ」

腕の痛みに顔を伏せたまま、夏子も負けじと言い返してくる。

（そうだそうだ、夏子。もっと反抗しろ。抵抗しろ。そういうお前が好きで俺の女にしたんだからなあ）

しっとり吸いつくような雪肌をとことかまわず平手打ちしながら啄治の倒錯した嗜虐欲はつものるばかりである。

夏子の乱雑に崩れた黒髪をいきなりわし掴み、顔を強引に引き起こす。

「い、痛ッ——」

こめかみに青筋を浮き上がらせた夏子の赤ら顔。化粧はとっくに汗で流れ落ち、素っぴんに近かったがちっとも美貌は衰えていない。眉間に力をこめ、白い歯が剥き出した。

「ケッ、このアマッ、ちょっと甘い顔してりゃつけ上がりやがって。嫌々、つき合ってる女があんなにいい声

で戯くわけないだろうが。売女！」

耳の傍で怒声を張り上げるものだから鼓膜が破れそうになる。頭がガンガンする。顔面を殴られた時の脳震盪状態に似ている。いつもこれで機先を制せられ、いいなりさせられていくのだ。

「貴様、好きでもない男に抱かれて、こんなにxxx、濡らすのか。え？ どうなんだ」

と啄治の手が尻を抓り、内腿を割って、下腹部を荒々しくまさぐってきた。

「やっ、よしてっ」

これまでなら黄門様の印籠よろしく、この事実の指摘でもって彼女のレジスタンスは萎えてしまうのだったが、どうやら今日の夏子はそうとう機嫌が悪いらしい。

萎えるどころか、陰毛を引っ張られる汚辱と苦痛もかまわず、激しく身体をくねらせると啄治の手を振り払い、さっと反転して悪魔と対峙するのである。

「ち、畜生っ、お前なんか、お前なんか、地獄に落ちればいいんだわ！」

猛烈な夏子の剣幕にちょっとばかりたじろぎを見せる啄治だが、そこは百戦錬磨のサディストだ。フンと鼻で嗤い飛ばし、グローブのような手でバシバシと彼女の頭を叩きつけ、そのまま頭髪を握り掴んだ。

「お夏、生理が始まったのか。そういえばお前は月の初めの方だったものなあ。気づかない俺が悪かった。ア

しの時の女のヒステリーは、刑法三十九条と同じで、罪には問えないもんなあ。ああ、悪かった、悪かった」

啄治は嘲ら笑いながら掴んだ頭髪をグラグラと揺さ振る。さらに美人キャスターの鼻をひょいと摘み上げたりもする。

いいように弄ばれて夏子は悔し涙にくれている。彼との間では、一応男女同権が建前のテレビ局の常識など一切通らない。腕力だけが人間の順序を決める。だから女は一生、男の奴隷なのだ。どんなに口でいい負かしてもビンタ一発食らえば平蜘蛛のように屈服しなければならない。悪魔の啄治……夏子は口惜しさにカッカしながら鼻を滑稽なほどにねじ曲げられる苦痛に涙を流すのである。

「おい、お夏。小鼻の毛穴の手入れが疎かになってるんじゃないか？ 用心しろよ。美人美人とおだてられても、お夏ももう二十七だ。お肌の曲がり角はとっくに過ぎてるんだからよ。油断してるすぐにボロボロになって、お嫁にいけなくなるぞ」

と、啄治はカラカラと哄笑する。それが夏子をプツンさせたようだ。キーンツと悲鳴に似た声を発すると鼻を摘まれているのも忘れて、両手をやみくもに振り回しはじめた。小さくて華奢な双つの拳が啄治の肩や胸にぶち当たる。手だけではなく、足の攻撃も加わった。綺麗に伸びやかで水泳で鍛えられた——そのスイミングスクー

ルでコーチをやっていた啄治に狩られたのだ——引き締まった足で悪魔の下腹部を狙って懸命に蹴ろうとする。しかし必死の反撃も啄治の鋼のような身体にはちょっとしたダメージすら与えられないようだった。だいいち、鼻を摘まれたままでは首もろくに動かせないし、彼が本気になれば鼻の骨を折るほどの力を加えるなど造作もないだろうから、やはり夏子はお釈迦様の手のひらの中で暴れる孫悟空よろしく、適当にあしらわれているとあってよかった。

「牝狐め」

啄治はそういうとベッドから下りた。むろん鼻を摘まれた夏子も男の力に従うようにベッドから首を伸ばしながら下りねばならない。

「どうした、もうレジスタンスは終わりか」

ようやく鼻を解放した啄治は今度は夏子のほっそりした首を両手で締め上げる。息が完全に詰まってしまうほどではないが、そのまま持ち上げようとするので夏子は爪先立ちしなければならない。

「白むちの顔の真ん中が真っ赤だと漫画みたいに面白い顔になるな」

なるほど彼女の鼻は全体がピンク色に紅潮している。

「離、離して……」

苦しそうに表情を歪めながら夏子はなおも散発的に足を振り上げ、啄治の太腿を蹴っている。

「馬鹿野郎！　いつまでも子供みてえなザマをやるんじゃないねえ！　こっちはその気になりゃお前の顔、グシャグシャになるまで殴ることも出来るんだからな！」

またまた絶叫調の怒鳴り声だ。それだけでも頭がボオーツとしてしまう。

「だけどよ——」

と、急に猫なで声になり、生汗に光った夏子のほっぺたを舌ベロで舐め回す。

「そうならばお夏はテレビ局に居られなくなるもんな。今の高給もパーになっちまうし、ってことは俺の小遣いもなくなるわけだ。そんな馬鹿な真似はやりたくはねえ。だからよ、お夏、俺を怒らさないでくれよ、頼むよ」

啄治の女にされて以降、敏腕キャスターの給料の大半は彼にピンハネされていた。

啄治は夏子の赤鼻をペロリと舐め、唇を強引に重ねつける。夏子の柔らかい唇は真一文字に結ばれていたが、かまわず音を立ててしゃぶるのである。

荒い鼻息を噴きこぼし、なんとか悪魔の嘴を逃れようと首を振りたくる夏子。

顔中が啄治の唾液でギトギトになった頃、いきなり彼の膝蹴りが鳩尾に突き上げられた。

「うぐっ……」

腹を押さえ、丸裸の女体がヘナヘナと崩れ落ちる。

「久しぶりにお夏の大好きな柔道しような。ここは和室が八畳とたっぷり取ってあるからよ。巴投げも出来るだろうぜ」

啄治は残忍に瞳を輝かせ、二つ折りになって呻いている夏子の黒髪をむんずとわし掴むと、乱暴に引きずりはじめるのだ。

「痛、痛ッ……お願い、柔道はいや」

身体を丸めて抗おうとするも、頭皮が剥がれそうになる激痛に脂汗を流しながら夏子はズルズルと絨毯の上を引きずられていく。

啄治は柔道というがどちらかといえばプロレスに近い。いや、結局、技などどうでもいいのであって投げ飛ばしたり蹴飛ばしたり組み伏せたりと、半殺しの目にあわせるのが目的である。以前にも一度、夏子は格闘技制裁を加えられぐうの音も出せないほどコテンパンにされた経験がある。驚くのは終わった後にほとんど外傷が残らない彼の絶妙なやりようである。激情的にみえる啄治だがすべては計算づくしの行為なのである。いずれにせよ、柔道でしごかれた直後の疲労困憊した身体でニュース番組に出演しなければならないのは、何にもまして辛かった。

日本間に連れこまれると、夏子はよく手入れのいき届いた美しい青畳の上へ投げ出された。

「おとなしくするから、許——」

哀願の言葉は途中で遮られた。問答無用とばかり、啄治は彼女の腕を引き千切らんばかりに持ち上げた。

「ヒッ」

宙に浮かぶように立ち上がらされた夏子の足を払うように腰車が炸裂する。啄治の腰に跳ね上げられた女キャスターの身体は綺麗な弧を描いて背中から畳に打ちつけられた。

「うーむ……」

全身に響くような痛みが走り、夏子は顔を歪めた。

「白むち！ 醜いデカパイしやがって！」

と罵りながら両乳ぶさを握りつけ、それに往復ビンタを食らわす。ブルンブルンとよく弾むバストだ。ピンク色の乳首が竦み上がっている。

「まだまだあ！」

啄治の次の技は予告どおりの巴投げであった。両腕を掴み、自分はゴロンと仰向けに転がる。その勢いにつられて引き起こされた夏子の臍のあたりに足裏をあてがって、反動とともに後方へ投げ上げる。夏子はあまりの素早い技に抵抗するどころか悲鳴を上げる余裕もなく部屋の隅の床の間へと素っ飛ばされた。生け花を入れていた花器が転がった。頭を下にして肩をつけ、夏子の身体は逆さまに壁に寄り掛かっている状態。おっぱいが胸もとへと移動して、下腹に二重三重の皺が刻まれる。艶やかな黒毛がふさふさと逆立ち、昂奮した猿のようだ。万歳

するような足の格好だがそのかかとが当たったらしく、掛軸軸が半ばから破れた。

「高そうな物を台無しにしやがって。帰る時にお前が弁償しろよ」

啄治は氣息奄々としている夏子を、その腋の下へ手を差しこんでよっこらしよと抱き起こした。そのままうなじへ両手をまわし、がっちりと組んでフルネルソンに決める。羽交い締めだがこれが案外苦しいものである。両腕が肩の上まで持ち上がり、頭がお辞儀するように下がってしまう。

「も、もう許して」

「楽しいじゃないか。お夏もさっきみたいに反撃してみるよ。お互いの技が丁々発止とぶつかりあってこそ格闘技の醍醐味があるってもんだろうが」

フルネルソンで懲らしめたまま、啄治は立ち上がる。

「うう……卑怯者ッ」

鬼、人でなし、などと続け様に罵ると、夏子は啄治の足を思い切り踏んづけた。本当に気の強い女である。啄治は再び夏子を畳へ転がし、彼女の背に逆向きに馬乗りになって下肢を両脇に抱えこんだ。ウエストを支点に下半身を折り曲げる逆海老固め。背骨が軋むように痛むだろう。それに啄治の目の前にはぱっくりと性器が曝される形になる。啄治のザーメンはあまりにも濃厚なため、女の肌はかぶれに似た症状を呈するのだが、夏子の内腿

もさくら色に湿疹となっている。オ×××の方は渴き切っているかと思えばさにあらず、脂汗もあるだろうがそれだけでない潤みが粘ついて黒ずんだ襷々もドギつくなっているようである。

「お夏はやっぱりマゾなんだなあ。投げ飛ばされるのが快感で濡らしてやがる」

「あーう……」

ギブアップを示すように畳をバシバシと叩き、黒髪を打ち振って逆海老固めをこらえている夏子に啄治の嘲笑を否定している余裕はない。整ったあごを畳に食いこませ、猿のお尻のように真っ赤な顔は乱れ髪に隠れて見えない。

啄治は散々夏子の悲鳴を絞りとった後、固め技を解き、畳に広がっていた彼女の髪の毛を足で踏みつけた。自分も一息つきたかったのだろう。

俯せのまま白いうなじを曝している夏子は脇腹を大きく波打たせ、声もない様子。

「なにノビてやがる。口ほどにもない奴だ。まだまだこれからだぞ。六十分三本勝負だからな」

と、啄治の嗜虐心はいっこうに衰えていない。

「チーン——」

試合再開のゴングを自分で口ずさんだ脳天気な悪魔に、夏子は頭と腕を掴まれて引きずり起こされた。口が半開きになっている。長い睫をしばたかせて完全にグロ

ッキーのていだ。面白いのはおっぱいで擦りつけていた畳の目が乳肌に格子状に痕になっているのであった。

牛刀で白魚の腹を裂くが如く、啄治は華麗すぎる足技を連発し腰の抜けた女体を前に倒し、後に倒し、横に転がし、宙に跳ね上げた。夏子のヌメるような乳白色の身体は全体がピンク色に火照り、顔面だけはさらに強く紅潮している。投げ飛ばされてしたたかに腰や背中を打ちつけても悲鳴の迸りは途絶していた。ただハアハアと犬のように喘ぎ苦しみ、表情を歪める余裕しかない。

ふと、啄治はこの間観た女子プロレスのテレビ中継で『吊り天井』なる荒技をやっていたのを思い出した。なかなかエグイ技で、俯せに倒されたやられ側のレスラーの四肢を、馬乗りになった掛け側のレスラーが自分の四肢を使ってすべて決める。掛け側はそのまま反動をつけてゴロンと背中から後へ倒れる。するとやられ側は両手両足を海老のように反らされ、ちょうどブリッジの格好で掛け側の上へ持ち上げられる。これが天井なのだろう。股関節と肩関節が限界までねじ曲げられ、背中がアームのように湾曲する、辛い姿勢だが観客は大喜びだった。とくに股間が向いた方の席の観客たちは生唾ものだったろう。おっぱいも扁平にひきつりペッチャンコになったがワンピースのユニホームに乳首の尖りが浮き出ているし、女の首の細さや長さが強調されてもいて、なかなかの見物であった。ショープロレスらしい互いの『協

力』あつての技といえるが、啄治と夏子ほどの力の差——彼女はほとんど人形と化している——があれば出来そうな気もする。

首根っ子を捕まえて立ち上がらせた美貌のニュースキャスターの足を掛けて後頭部をチョンと押すと、彼女は膝からばったりと俯せに倒れた。あとは見よう見真似で二肢をそれぞれ絡め、手首を取った。

「お夏、トドメの大サービスだぞ」

手綱のように手をグイと引き上げる。乱れに乱れた黒髪に包まれた顔が畳から持ちあがり、双乳も離れてブルンと吊り鐘になる。

「うう……」

夏子はがっくりと頭を垂れつつ低い呻きを発したが、しだいに背中が折り曲げられてくると汗に湿った重い髪を後に跳ね上げるようにして赤ら顔を晒し、あごを突き出して苦痛にムチムチした頬を引きつらせる。

啄治は残念ながらその表情を拝めなかったが、肩の肉のよじれ具合が案外セクシーなのを発見してほくそ笑んでいる。

「痛タタ——」

啄治の魂胆はわからぬまでもこの責めは辛すぎると悲鳴を叫ぶ夏子。

「いっせいの！」

と、啄治は掛け声もろとも後へ勢いよく引っ繰り返っ

た。

「ヒエーツ」

夏子は自分がどうされてしまったのか、まったく理解できなかった。だが、股関節、背骨、そして腕のつけ根が猛烈に軋んでキリキリと痛むのである。

「ヒヒヒ、どうだ、女キャスター。スポーツニュースの原稿もたまには読むだろう。これは女子プロレスの選手が味わっている苦しみだぞ。よく体験して仕事に生かせよな」

啄治は自分の顔にかかってくる夏子の黒髪の臭いを嗅ぎながらいう。啄治の赤銅色の身体の上に夏子の肉体が海老反って天井を作っていた。白い喉を晒し、大口をパクパクさせている毛穴の開き切った美貌。必死に耐えているというより、取らされている姿勢の苦痛に声が出ないのが本当であろう。腕を外側に回転させられているので背筋の湾曲を緩められない。膝の裏にあてがわれた啄治の足が突っ張るたびに股間が持ちあがり、女陰が剥き出しになる。彼女の足首から下は剛毛にまみれた内腿へと絡みつかされて、爪先立ちでアキレス腱を限界まで引き伸ばしているのと同様の状態になっていると思えばいい。この時ばかりは夏子の形の良いバストも豊かなヒップも目立たないが全身が極限まで張りつめている感じでエロチックである。彼女の裸体は卵の白身でも塗ったようにヌルヌルと汗を掻き、背中や臀部からポタポタと啄

治の身体へ雫を落としている。

（畜生。これじゃ髪の毛しか見えねえ。ビデオでも持ってくるんだった。失敗したな）

啄治は苦笑したが想像は一物に力を漲らせるものだ。先程までの半勃起から今やデカ魔羅はビンビンに天井へとそそり立った。文字通り肉の天井へである。

この状態が五分も続けばレスリングのトレーニングを受けたはずもない素人のインテリ女が断末魔の咆哮をあげるのは当然であった。啄治がオラオラオラと揺さ振りをかけてやると絶叫を迸らせ、口から泡を噴いて悶絶したのだった。

女とはいえ、力のまったく抜けた人間をこうした無理な格好で持ち上げているのは啄治といえども困難で、夏子をどっと横に投げ捨てる。

「フー。結構いい汗掻くな、こりゃ」

額の汗を拭い、タバコに火をつける。いい女を苛め抜いた後の一服こそ、サディストの生きている証だ。胡坐をかいて夏子の傍らに座り直す。夏子は完全に精根尽き果てたように伏臥している。片手は頭上にあって汗ばんだ毛根を散りばめた腋窩を晒し、一方の片手は腰骨のところまで薄ら開いたその手のひらを天井へ向けている。下肢のひとつはすらりとノビきり、綺麗な愛らしいかかとを上向かせていたが、隣ははしたなく膝を曲げて蛙脚となって跨ぐらがあらわとなる艶姿だ。呼吸に脇腹を上下

させている蠢きだけがこの肉体の生の唯一のシグナルだろう。

いつみても生汗に内腿まで濡らしている女体はそそのものである。とくにケツ。夏子のように豊満な双臀を持つ女は尚更である。キュッとくびれたウエストからこんもりと尻梁の稜線が高まっていき、もちろん横にも張り出し、仇っぽい谷が一直線に股間へと切れこんでいく。その双臀が剥き卵のようにツルンとヌメ光っている。手のひら一杯に尻肉を掴み取り、たっぷりと揉みにじってやりたくなる。指を食いこませて割れ目を露出させたり、ガキッと歯型がつくほど噛みつきたくなる。

(こいつはどうしてもカマを掘らねば収まりつかねえな)

啄治は常時携帯している筋肉弛緩クリームを取り出した。ノビている夏子の腰を掴んで下半身だけ引き起こす。膝をつかせて尻を高く持ち上げる淫らなポーズ。女盛りの張りの漲る双臀を左右へ割るといやらしい会陰色の肛門が現れた。乳白色の肌の色と比べれば随分とくすんだ色をしているのがゾクゾクする。

中指でクリームを掬い、まず周辺部へなぞりつけた。指先でおちょぼ口をつつくと、そこがピクッピクッと引き締まる。ジワジワ没入を開始。クリームのおかげか、気絶しているのも余計な力が抜けているせいか、啄治の太い指もわりと簡単に突き進んでいける。

夏子の反応はまだない。

「ヒヒ、きつい一発が気つけ薬の代わりだぜ。お夏」
悪魔の眩きも企みも知らず、夏子は奥二重の瞳を閉じ、色の失せた唇を半開きにした横顔を青畳に押しつけているのだった。

牝豚、運の尽きホテル

小城啄治はネクタイを締め直しながらエレベーターに乗った。コンピューター制御の高速エレベーターは八階から最上階の二十三階まで一気に上昇する。

啄治は扉が開く前にそっと股間を掴んでみた。やはり性器の先端は少しヒリヒリと痛むようだった。いくら筋肉弛緩クリームを使ったといってもアナルセックスの直後はどうしてもこうなる。激辛カレーを食べたように汗を掻き、スカツとする食後感はあるのだが、口の中は当分火照りまくるあの状態に似ているだろうか。もちろん交接部の苦痛にのたうっているのは女の方が著しく、今頃女キャストはベッドの上で尻を押さえて号泣しているに違いなかった。

性器の灼けるような疼痛に比べて下腹は猛烈に爽やかで軽い。五キロ減量した時のようである。溜まっていた精液を一滴残らず出し尽くしたのだから当然かもしれない

い。肛交の後、放心状態の西田夏子を土下座させ、反抗した詫びと隷従の誓いを何度も何度も繰り返し口にさせ、それからなんともう一度、尺八を吹かせたのであった。自分でも驚くほどの精力だったが、これもきっと夏子が意外なレジスタンスを試みたおかげだろう。女がジャジャ馬であればあるほど燃える啄治なのだ。口腔に放出されたザーメンを頭をしばかれながらコクリコクリと嚙下する夏子の半ベソ顔はそんなジャジャ馬を征服した証しでもあり、心行くまで網膜に焼きつけた。

（まったくいい女はこたえられないねえ）

啄治は満足そうに股間をひと撫でして再びネクタイに手をやった。

キングスホテル最上階——

ここは小城啄治の職場である。エレベーターから下りるとすぐにカウンター式の受付があり、愛らしいユニホームを来た系の娘がこちらに意味ありげな視線を飛ばして軽く会釈する。なにしろ容姿端麗な啄治であるから色目を使う女は大勢だ。啄治の方は夏子のような極上の女にしか興味はないが、啄治の本当の姿を知らない軽薄な娘たちの挑発行為はひきもきらない。この受付のワンレンボディコン娘も例外ではなく毎日ここを通るたびに啄治は媚びるような牝の視線に曝されるわけである。

彼は適当に会釈を返し、従業員用の扉の方へ進んでいく。

と、入り口からぽんぽんと花柄のビーチボールが転がってきて啄治の足にぶつかった。それを追って——一年生くらいの女の子が駆けてきた。生意気にもビキニの水着をつけている。ピンク色のスイミングキャップを深くかぶりすぎて眉毛まで隠れてしまっているのがなんとも愛らしい。彼女はちょっと驚いたように啄治を見上げ、
「先生、今日は」

といった。啄治はボールを拾うと腰を屈めて手渡し、やあ、今日はと微笑み返す。淫魔小城啄治も人の子、あどけない姿に心を洗われているのかと思えばとんでもない間違いである。彼の脳裏には今さっき姦してきたばかりの西田夏子二十七歳のドぎつい色を持った陰部が浮かんでいるのだ。その精液まみれの毛饅頭と同じものをこの小娘も持っているのかと思うと不思議でならないのである。

(こいつはいったいどんな女になってどんな男とまぐわるんだろう。どんなおっぱいをぶらつかせて、どんな声を出してヨガるのか)

もっとも彼はロリータの趣味は持たないし、職場では——ごく一部を除いて——紳士で通っているのでトイレに連れこんで悪戯を仕掛けるなどといったヘマをやらかすはずもなかった。

彼女は啄治がスイミングクラブのコーチであるのを知っているらしく、人なつこく話し掛けてくる。

「綾ちゃん、どうしたの。早く来なさい」

母親らしい声がして、娘はくるりときびすを返して駆けていく。それを受けとめるように白いローブを羽織った女が姿を現した。頭には娘と揃いのピンク色のキャップ。水着の柄も同じだが、こっちはワンピース。三十代半ばと見られる母親は啄治に気がつくとも満面に笑みを湛えて、どーもといった。そこそこ拝める顔。プールに入った後らしく化粧っ気のない素っぴんだが眼がクリッとしているのでボケた感じはしないし、妙に色気のある肌の艶をしている。大きく開いた胸もとの小さな黒子がちょっといやらしい。贅肉もほどほどの丸い身体はこってりとグラマラス。胸のふくらみはまだミルクをためているように巨きくて、ボリュームたっぷりの腰つきとともに押さえきれない年増女の性的欲求を現しているかのようだ。ムチムチと網膜にしみる太腿を少しくねらせて母親は娘を抱き上げた。

「小城先生ですわね。わたくし母と子クラスの近藤と申しますの。先生が担当でなくて本当に残念でしたわ」

甘ったるい声でしなを作る母親。駄目。落第——。啄治は冷ややかに一礼をするとさっさと歩きだした。啄治は年齢などとくに気に掛ける男ではなかった。もちろん六十代以上では困るがそれ以外ならすべてOKである。気が強く誇り高き女、この条件が満たされていれば五十代だってかまわない。現に啄治は以前、青山で老舗の宝

石店の女社長を髑りものにしたが彼女はたしか五十一二だったと思う。三十九歳で未亡人になったとかいう恐ろしくプライドが高く鉄火な女だったので、ちっとも年齢など気にならずに手ごめにしたものだ。しかし男に最初から媚びるような浮気者の女であればどんなに美人でも年若くてもお断わりである。自慢のデカ魔羅は一ミリだって反応しない。

それが淫魔小城啄治の美的意識なのだ。

『関係者以外立入禁止』と貼り紙をされた扉を開けた。狭い通路を歩いていくと数人いるスイミングスクールのインストラクター専用の個室が並んでいる。そこで服を脱ぎ、仕事着である水着をつけ、ガウンを羽織る。眼を保護するためのグラスとキャップを手に通路へ戻る。啄治はさらに奥へ進んで通路のつきあたりにあるドアを開けた。

さっと視界が広がった。まばゆいばかりの照明が全面ガラス張りのブースの中へ燦々と注ぎこんで来ている。

「やあ、先輩、お早ようございます」

インストラクターの中では最も若い中村が首に双眼鏡をぶら下げた格好で振り向いた。体育会系としては軽く頷くだけで後輩には挨拶もしない。

啄治は前へ出て中村が譲った椅子に腰をかけた。ガラス越しの眼下には美しいエメラルド色のプールが三面、贅沢な広さをもって並んでいるのだった。今や激烈な過

当競争となっている都内ホテル業界では生き残りをかけてどこも他にないような付加価値を宣伝しあっているのであるが、ここキングスホテルの売りがこの豪華なプール施設であった。三つのプールにはそれぞれ個性があり、インストラクターの間でAプールと呼ばれているいちばん奥が区民レベルの大会も開ける本格的な二十五メートルプール。手前右側のこの中では最大の面積を持つBプールは造波装置が備えつけられてリゾート感覚を存分に楽しめる。そしてその隣はこじんまりとした初心者や子供が利用しやすいおもに教室の時に用いるCプールと、ホテルの宿泊者ばかりでなく地域住民から仕事帰りのOL等にも顧客を拡大しているのがミソである。狙いは一応成功しているらしく、今も平日の午前中であるのにA、B、C、三つのプールともかなりの入りで活況を呈している。

啄治はそれぞれに双眼鏡の焦点をあわせていく。この監視用のブースから手の空いたインストラクターが交替で事故防止に眼を光らせるのだが、思えば数か月前、Bプールの波の狭間に素敵な肢体を泳がせていた西田夏子を発見したのもここからであった。あれは深夜に近い時刻だったと思うが、彼女は仕事の疲れを癒すためによく通っていたのである。

(それが気鋭のキャスターの運の尽きだったわけだな)

啄治は言葉巧みに接近し、頃合をみて捕らえ力づくで奪った最初の日を思い出してついニヤリとしてしまう。調教が進んでも今日のように激しい抵抗を見せる理想的な女はそうお目にかかるものではないので、啄治はこの仕事に感謝しなければならなかった。「Cで真実さんがマタニティクラスを指導してます」

中村がちょっと意味ありげな声でいった。双眼鏡をそちらへ向ける。十人程度の女たちがプールの中に並び、その正面で一人の女が長い手でストロークの格好を真似てみせている。浅黒い肌にブルーの水着がよく映えているすらりとした女だ。ホテルとしてはプール施設といったハード面ばかりでなく、人的要員のソフトの充実にも努めたのだが、彼女はその最大の目玉のひとつともいいだろう。

大谷真実二十四歳。競泳選手としてローティーンの頃から活躍し、オリンピック候補ともなった実力の持ち主だったが怪我のために挫折を余儀なくされ、悲運の美人スイマーとして一時マスコミの話題をさらった。芸能界入りも噂されていた彼女が突如、このホテルのインストラクターにスカウトされたのが一年前。むろんホテル側は大々的に宣伝して集客効果を上げたのはいうまでもなかった。

啄治は倍率を上げ、真実の姿を鮮明にする。小麦色の美貌は精悍でいかにも鼻っ柱が強そうだ。眉もはっきり

として濃く、瞳が大きくて、ハーフのように彫りの深い顔立ちである。水泳選手らしく肩幅はあるほうだろうが、いかつい感じはせず白人系のスタイルといったところか。元スポーツウーマンの泣き所はスリーサイズのスリムさかもしれない。胸はかすかにふくらんではいるものの、Bカップもないだろう。ウエストは引き締まっている。が、臀部は胸と同じで女らしい丸みにやや乏しく、逞しい魅力的な太腿があるのに惜しい感じだ。もっともグラマーなスイマーなんていないのだから、ないものねだりをして仕方がない。

それより真実の笑顔の愛らしさを堪能すべきなのだ。野性的なマスクを崩し、真っ白な歯が印象的な笑顔。誰もが好きにならずにはおれない表情。それは同性にとっても同じらしく、彼女の受け持つクラスの出席率は毎回飛び抜けて高い。あんな実績があるのにおごるところなどなく、気さくで親しみやすくすぐに打ち解ける爽やかなスポーツウーマンタイプの人柄だけなら、他のインストラクターだって負けないが——啄治の評判だってそうなのだ！——あの笑顔だけは真似できない。エチケットを踏み外して生徒たち——いい歳をした熟女が多い——からファンレター以上の熱烈な手紙が届く場合もあるようである。

真実は水中での軽い準備運動をはじめた。妊婦たちも何がおかしいのか微笑みながら従っている。

(真実にレスっ気なんかあるわけないだろう。お生憎様。このスレンダーな身体の間々まで小城啄治様のチ×××が突きまくってんだからよ)

この美人コーチだけが啄治の本当の姿を知っている唯一の職場関係者になるのだが、その記憶の詳細をひもとく前に中村が声をかけてきた。

「真実さん。今日も決まっていますね」

この男はどうやら真実に気があるようなのだった。

「あの足ときたら……グッとこない男はいないでしょう」

そうかね、と気のない返事をしながらも啄治は双眼鏡を返そうとはしない。

「一昨日の夜、夕飯に誘ったら断られましてね」

急に情けない声になる中村君。それは仕方がない。一昨日の夜は……。

「芸能人とつき合っている噂もあるし、僕なんか鼻にもかけてもらえませんかよ」

真実が泳ぎだした。美しいホームだ。長い手足が無駄なく水を捉えてひと掻きするだけで滑るように進むのである。みんなうっとりで見惚れている。もちろん啄治もだ。中村などは実際涎を啜っている。

「噂といえば——」

中村は擦れた声でいった。

「大谷真実レス説というのがあるんですけど」

振られた腹いせもあるのかもしれないが、余りに美しいものは愚弄してみたくなる、誰にでもあるサディズムに衝き動かされているのだろう。

もっと話だしそうになるのを啄治は制した。この男は口が軽いし騒々しすぎる。

「つまらないこといってないで、タバコを買って来てくれ」

中村は犬のように従順にブースを出ていった。

真実が現在受け持っているのはマタニティクラスだった。昨今のプレママは部屋にじっと閉じこもってなどいない。出来るかぎり身体を動かすのが常識になっている。水泳は妊婦特有の腰痛に最適だし、アソコの締まりも良くなって安産につながる効果があるらしい。なるほど水泳選手の真実のアソコの締まりは抜群で西田夏子に勝っている。

(今日も蛙腹抱えて締まりの特訓かよ。ほんとに安産のためか、水牛どもめ。亭主との夜のためじゃねえのか、アーン?)

啄治は双眼鏡を黒真珠の美女から色とりどりの水着をつけた妊婦たちへ向けた。ちょうどお腹の辺りまで水中に没しているため、一見すれば妊娠中とはわからないのだが、じっくり観察眼を働かせれば一目瞭然だ。まず素肌の色合が違う。ピチピチとした張りのある雪白ではあるものの、どこかやはり青みがかかり、皮下脂肪の厚さ

を思わせる。顔の浮腫もあるだろう。スイミングクラブに来るくらいだからつわりも収まり、様態が安定期に入った臨月間近の時期に違いないが、どうしたってあの巨きな腹を抱えて何週間も暮らすとなれば疲れや瘦れも出てこよう。それでも胎内に宿る新しい生命の鼓動を一杯に感じつつ、来たるべき赤ちゃんとの出会いを控えて、今が女の最高に幸せな日々と表情は宝のようににこやかで和やかである。

最も彼女たちの妊娠を物語っている部分となればバストに決まっている。ワンピースの水着から——当然マタニティ用であるのに——こぼれださんばかりにふくらんだ乳房。大きくなるお腹とともに女性ホルモンの豊富な分泌に反応して、ここからでも蒼い静脈が見えるようにパンパンに腫れ上がったそれは生暖いミルクを満タンに孕んで、赤ん坊の口に吸われるのを待つばかりなのだ。乳輪の面積が拡大し、色素も濃くなっていると思われる。ひょっとしたら透けて見えないかと眼を凝らしたがさすがに水牛たちも気にしているようでガードは万全だった。乳頭だって男の親指くらいには肥大してるはずだ。想像するとゾクゾクしてくる。乳房マッサージでこったり揉まれ、陥没乳首を防ぐために何度も引っ張りだされるたびにツーンと子宮が収縮を起こして、まぐわいがご無沙汰のお前たちはちょっと頬を赤らめて昇せることもよくあるのだろう。気持ちいいからといってしつこ

くするのは早産の元だが、そこまで巨きくなってしまえばさほど心配するほどでもあるまい。啄治は全裸の妊婦が巨乳をマッサージしている姿を思い浮べる。

(いけねえ、いけねえ)

股間が思わずふくらんできてしまう。西田夏子で思い切り出しておいたはずなのにすぐこれだ。ブリーフみたいなパンツでは形まであらわになってしまうのだから、気をつけねばならない。水泳教室のインストラクターが生徒の水着姿に昂奮していたら即刻クビだ。

妊婦たちは腹に負担のかからない背泳をやりはじめた。一人一人の手とり足とりして真実が教えている。

(ん？——)

啄治はファインダーの中に入ってきた一人の妊婦に注目した。薄紫色の趣味のいい柄の水着をつけた女は丸い腹を水面に浮き立たせ、しなやかな足のそよぎだけで泳いでいる。一瞬にして啄治の嗅覚は他の水牛たちからその女だけを分離していた。高い吹き抜けになっている天井からのきつい照明が波に反射して容貌をあからさまに拝めなかったが、美しい鼻筋だけははっきりとわかる。年齢は三十代にはなっていると思われた。が、肌は瑞々しく輝いている。手足もほっそりと長く優雅さと澆刺さを兼ね備えているようだ。

(この水牛はいけるかも)

根拠はないのだが啄治はこういう直感を大事にしてい

る。夏子の時も真実の時も最初にピーンときたものだった。それと同じ胸騒ぎがこの女からは受ける。

(牛じゃなくて馬だな。ジャジャ馬だぜ、たぶん。いや、絶対に……)

確信を呑みこむようにして啄治はその女を双眼鏡で追い続ける。

(真実の野郎、早く次のクールに移りやがれ)

そうしなければとっくり顔を観察できない。啄治はイライラしながらそれでも丸いお腹に乗っかるような形の女の胸や、ターンの時に一瞬水面上に現れる豊満な臀部に鼻息荒く熱中している。

真実が笛を吹いたようだ。列になって泳いでいた妊婦たちは一様に立ち上がりはじめた。

「……！」

ほっそりした両手で顔を濡らす水を切りながら立ち上がった女をみて、啄治は心臓が止まるほどの驚きを覚えた。

「松本悠子じゃねえか……」

呻くように呟く啄治。双眼鏡を持つ手が震えている。紫地のスイミングキャップの位置をととのえ、そこからほぐれこぼれた髪の毛を耳の後へ掻きあげているなんとも色っぽい仕草の妊婦は啄治の学生時代の同級生ではないか。

「悠子……てめえか……」

口ずさむように女の名が漏れてくる。そのつど啄治の胸には十数年前の痛切が熱い塊となってこみあげてくる。長い時を隔てているのに啄治は松本悠子の顔を一瞬のうちに判別できたのは、彼女の美貌が少しも変化していなかったのと同時に啄治の脳裏に彼女の残像が今も鮮明に焼きついているからだった。

妊娠してたのか、とか、女っぷりをを上げやがって、などと、とめどもなく呟きが口をついてくる。松本悠子は他の妊婦たちと同じように蛙腹の体型をなし、ふくらんだ乳房をもっていたが、明らかに他の妊婦たちとは格の違う美貌の持ち主であったし、それだけでなくその秀麗な顔の造作はただならぬ知性と勝ち気さを表しているのである。

松本悠子——実はこの女との出会いがなかったならば現在の淫魔小城啄治の存在はなかったであろうと思われるほど、彼にとって重要無比な女なのであった。大学を中退したのも彼女のせいであるし、啄治の狂執的なジャジャ馬虐待願望が宿ったのも彼女の影響とっていいのである。もちろん精神分析学の助けを借りたことはなかったが啄治は強烈にそう自覚しているのであった。

彼女に最初にあったのは大学一年の時だった。

忘れもしない、学生会館の小ホール。昼食をすませた啄治が何気なく通りかかると二三人の学生がビラを配っていた。その中の女子学生が啄治を認めて走りより、ブ

スツとした表情でビラを押しつけてきた。それが同じく一年生だった松本悠子である。ビラの内容はすっかり忘れたがその時の衝撃は今も忘れない。彼女の美しさは段違いとって良かった。昔と違い、偏差値レースの頂点のようなこの大学にも週刊誌の表紙を飾るような美人がいるのは知っていたが、それはやはりまだ社会的話題になるくらいだから稀に近く、まして何千人という学生数からしても啄治などにはお目にかかれる代物ではないと、漠然と思っていたものである。

おそらくミスキャンパスといった催しに出場すれば間違いなく優勝するはずの美貌の女子大生は、そうした女性蔑視につながる催しなど鼻にもかけない恐ろしく気の強い性質の持ち主だったのだ。

「そうだそうだ、思い出したぞ。ビラは環境保護だの人権擁護だの、そんな小賢しい理屈をこねまわした内容だったっけ、悠子」

いわゆる集会ビラだったが、色のついたヘルメットを被ってワッショイワッショイするような類の過激なグループではなく、じっくり話し合って行動しましょうというボランティアに近いソフトな学生運動であった。後でわかったのだが一年生ながら松本悠子はすでにその運動の中核メンバーだった。法学部の秀才としても教授たちの間では評判をとって、美貌とともに一種のマドンナ的に存在になりつつあったらしい。

ビラを受け取っても啄治はそれには一瞥もくれず、あんぐりと馬鹿のように口を開けたまま洗い晒しのジーンズに黒のTシャツといった気に掛けない服装にぴったりのポニーテールの女子学生を眺めていたものだ。こんなザマに陥る男子学生には始終遭遇していたらしく、悠子はうんざりした表情で長いほっそりした指——ちっとも変わっていない！——をビラへさして○月×日にどこどこへ来てくれるように、とわざわざ確認するのだった。その声がまた素敵だと啄治は昇せあがってしまう。もちろんノンポリの啄治には縁遠い種類の集会であるのにただただ彼女によく思われたい一心で犬のように頷いてるのである。もしその時、これだけのことだったら啄治と悠子の関係は淡雪のようにはかなく消え去っていたに違いなかった。なぜなら、彼女の魅力に吸い寄せられるようにオルグされた男子学生はあまたいたし、運動のためと割り切っている彼女にとってはそんな雄どもなど眼中になかったからである。それにこの運動は地味なもので時間と忍耐の要求される、そういった軟派の連中の最も苦手なボランティアも多く含まれていたのでボロボロと櫛の刃が欠けるように脱落していく場合がほとんどなのだった。例外なくきっと啄治も直ぐ様ケツに帆かけて退散しているに違いなかっただろう。

ところが——悠子の愛想のない啄治へのレクチャーが終りかけた頃、小ホールの入り口から屈強な体躯の男た

ちが数人、ドタドタと駆けこんできたのだった。

やめるやめる！ と男たちは怒気荒い声を張り上げ、明らかに悠子らのグループめがけて突進してきた。

『学内での無届けビラ配布は禁止されているぞ！ ただちに解散しろ！』

彼らの言動からして学生部の職員たちであるのはすぐに理解できた。この大学の学生部が体育会系の出身者で固められているのは水泳部に顔を出していた啄治の知るところではあったが、機動隊の如き役目を担っているとはつゆ気がつかなかった。

『何をいってるのですか、ここは学生会館ですよ。学生会館で学生が何をしようとななたたちには関係のないはずだわ』

彼らの前に立ちはだかり、毅然とした態度をみせたのは悠子であった。まさにマドンナ、輝くような勇ましさであった。彼女の眦の吊り上がったきつい表情は長い年月を隔てた今も夢に出てくる時がある。色白の化粧のまるでしてない頬が朱に染まり、カァーッと燃えているのがわかった。

その剣幕にさしもの猛者たちも一瞬気押されたように口をつぐみ、足を棒にしたが実は彼女こそ彼らの狙いであったのはそのサディステックな目つきをみれば啄治には容易に想像が出来た。

(今、俺が西田夏子や大谷真実をみる眼光と同じだっ

たものなあ)

啄治の口元がニタついてくる。

『馬鹿野郎！　ここの運営も大学が取り仕切っているんだっ。御託をいわずにさっさと解散せんか！』

学生部の建前としては一九六十年代から七十年代のあの学生運動の嵐だけは繰り返したくないのだったろうと思う。あの頃に比べればまったくエネルギーを失ったアホバカ学生に不穏な空気など微塵もあるはずがなかったのだが、管理者とはなかなか安心できない人種らしい。悠子たちのような穏健な運動でも、秩序を乱す萌芽となりそうなものは小さいうちに鎮圧するのをよしとしているのだった。悠子のように一年生からグループの幹部クラスに抜擢されるような学生はとくに要注意人物としてマークして、監視を怠らない。

そして彼女は生唾ものの美人ときている。本音はここにあった。彼女を挑発して、いざ強制排除となればしめたもの。どさくさに紛れ、混乱に乗じ、胸やお尻に触り放題のキャッチボールを楽しめる。ミスキャンパス第一候補の彼女は顔ばかりでなく、身体のほうも一年生とは思えない発育ぶりを衣服の中に隠しているともっぱらの評判であったのだった。

さて、解散しろ、しないの押し問答は延々続けられたがとうとう時間切れの宣告がなされた。

『解散しなければ強制排除だ、それ！』

どっと襲いかかる角刈り軍団。

『学生部の横暴反対！』

悠子の金切り声も男たちの怒号に掻き消されがちだ。何しろピンポイント・タックルの標的は悠子に集中しているところが男たちの本音を露骨に現わしている。他の学生などほとんど眼中にないのだから傍からみていると噴飯ものだが、悠子にとっては笑っている場合ではない。前からのタックルは一度二度とかわしたが、後からの攻撃にがっちりと腰に組みつかれた。悲鳴をあげて藻掻くものの前からきたゴリラ並みの上背の男に頭を小突かれる。何するのよっ、と紅潮した声で叫んでみても背後の男にTシャツの上から胸をわし掴まれて、ああ、と硬直してしまう。背中をドンと押され、待ってましたと手を広げている頭髪の薄い中年男にキャッチボールだ。いい歳をしてるくせに深々と悠子を抱き締めたそいつはパンパンに張ったジーンズの尻を撫でまわしさえしている。

『変、変態っ』

彼らの真の魂胆がはっきりするにつれ、悠子の狼狽えも大きくなっていく。何度もキャッチボールされるにつれ、へとへとになっていくのがわかった。

『助けてっ』

ついにこの強気のジャンヌの口から女らしい声が発せられた。そしてそれはなんと光栄なことにボォーッとし

てつつ立っていた啄治へ向けられたのであった。彼女にとっては必死のところであるが、仲間の男子学生は文科系の青びょうたんばかりでまったく頼りにはならず、窮した拍子に体格のがっちりし逞しい啄治を救援者として求めたのであった。それからの数分間の成り行きを啄治はほとんど覚えていなかった。夢中で混乱の中へ飛びこみ、獅子奮迅の格闘の果てに悠子だけを救いだして学生会館から逃げ出したのだという。啄治の鋼のような肉体が女を助けるのに使われたのは後にも先にもこれっきりでである。スーパー・ヒーローの出現に悠子が喜ばぬはずがなかった。もうビラ配りの時のような無愛想を彼に向けることはなかった。啄治は蟻の数ほどいる不心得なニセボランティアたちの中から一気に抜け出してマドンナの信頼を勝ちえたのであった。

……

妊婦たちが水から上がり、プールサイドで終了の柔軟体操をはじめた。タオルで拭かれた三十二歳の松本悠子の肌の色艶はあの時よりも眩しくヌメ光っているようだった。胸も腰も、妊娠を割り引いて考えても豊満になっている。当たり前だ。当時はまだバージンだったはずだから。ピチピチと弾むばかりで硬い芯が残っている青臭さがあったものだが、人妻の豊かな性体験がそれを揉みほぐし適度な柔らかさと粘りを混じりあわせた理想的な肉体に成熟しているはずである。

(弁護士にしとくにはもったいない身体だぜ、まったく)

啄治は心の中で感嘆したが、そう、彼女は在学中に司法試験にとおり、法曹の道を歩きだしたのであった。

せっかく勝ち得た信頼も時が進むとともにメッキが剥げてきてしまったのだった。どんなに社会改革を夢見る理想高き学生を演じてみても、やはり助平心で彼女に接近した鎧は事あるごとに露呈したわけである。そこへ悠子の司法試験合格が追い打ちをかけた。これが二人の間を決定的に隔てる契機となった。もっとも熱を上げていたのは一方的に啄治のほうであって、悠子にしてみれば心強い用心棒が出来た程度に思っていたにすぎず、その証拠に啄治が頃合をみて何度か試みた誘いにも彼女はとんと乗ってこなかったのである。

ボランティアの相談ならまだしも専門的な法学の勉強に、啄治が口を出せるものではない。今度、彼女の救援者となったのは運動を通じて知り合った別の大学の風采のあがらない法学生であった。おっとりしてはいるが学究者タイプの彼に悠子はしだいに惹かれていく。焦った啄治はとうとう本性を現わし、用件を偽って彼女を一人、おびきだした――。

(今ならもっとうまくやっていたのによ)

舌打ちする啄治。思い出すだに悔恨が胸をついてくる。夜の日比谷公園に連れこんだまでは良かったがキス

のねだり方が唐突すぎたのだ。と、啄治はそう思いこんでいる。あれさえもう少しソフィスケイトされた物腰でやっていれば悠子はものに出来たはずだったと。

(あんなチビの眼鏡ポンチにひっさらわれずに済んだんだ)

とにかく悠子は激しく啄治を拒絶した。そんなつもりで我々是一緒にやっているのではないのだ、悠子は強く啄治を叱責した。もうこれまでと観念した啄治は一か八か実力行使に打ってでた。顔を往復ビンタ、鳩尾に正拳を炸裂させて茂みに押し倒し、ブラウスの上から胸乳をむんずと掴んだ。その時の感触は手のひらに何年も残っていた。ボタンを引き千切り、ノーブラが習慣の悠子のバストがもう少しで拝めるといふその瞬間、彼女の金的蹴りを思い切り食らってしまった。啄治が怯んだ隙に逃げだした悠子は大声を上げて救いを求め、運悪く通りかかった警察官に啄治はあっさりと御用になってしまったのだった。学生部からマークされていた松本悠子と同じグループに所属していた啄治もまたブラックリストに載っていたらしく、大学側はこれ幸いと退学処分にしようとしたのだが、水泳部のOBのコネで履歴書に傷がつく退学から辛うじて中退に減刑された。悠子のほうも彼女が学生運動をしていた情報が警察に流されてかえってしつこく警察が嗅ぎ回りだしたのを鬱陶しく感じたらしく、必要以上に啄治を訴えようとはしなかったのも、前

科もなかったことから結局、不起訴処分となったのである。

しかしもちろん彼女とはそれっきりになったし、東京にも居ずらくなって、いっそ地方へと下り、ほとぼりを冷ますのを余儀なくされた啄治であった。

それ以降、悠子の噂は風の便りに訊いてはいた。あの風采のあがらない法学生と結婚したことや新進気鋭の女性弁護士として活躍しているのも知っていた。もう二度と逢わないと知っていながら夏子や真実やその他の女たちを抱いている最中も虐めている途中も、心のどこかで悠子の面影を求めている自分を啄治は忸怩たる思いで見つめていた。気の強い女を求める嗜好こそ、松本悠子との忘れえぬ記憶の傷跡であるのは明らかなのであった。

スパルタ美女シゴキ

その悠子が目の前にいる！ 巨きなお腹をした身体をワンピースの水着に包んで！

大谷真実が指示する柔軟体操に膝を曲げ、無防備なボテ腹姿をとくに疲れた様子もみせず、上下させる女弁護士——それは若き日の小城啄治の熱い思いの丈を一心に集めさせた理想の女なのだった。

(何人目のガキだ？ 悠子)

その問いは愚問である。真実のクラスは初産を迎えたプレママだけを対象としているはずであった。

(三十二になるまで子供も産まずに仕事にかかりっきりか。お前らしいぜ)

彼女の美貌がいっこうに衰えず、それどころか、ますます輝いているようにみえるのははじめて子を宿した女の幸福感が全身に滲みでているからだろう。

啄治は改めて悠子の爪先から頭のとっぺんまでを双眼鏡で隅々観賞する。引き締まった足首やほっそりしたふくらはぎの印象は学生時代のままといい。しかしねっとりとした生っちょろい太腿の肉づきは年増の人妻らしくムチムチとしている。残念ながらムツと盛り上がっているだろう跨ぐらの▽部分はズンと重たそうなお腹に隠れている。そのお腹は綺麗なメロン腹。頂点には臍がやや浮き上がって水着にポツを作っていた。啄治が公園でわし掴みにし、もう少しで全貌を曝け出す寸前だった双乳はあの時を二まわりも三まわりも上回る巨きさになって、たっぷりと余裕をもたせたマタニティ用の水着の胸のカップにおさまっている。運動の後だからだろうが、U字型に開いた胸もとはなんとなく火照っていて色っぽい。乳ぶさの谷間の裾くらいは拝ませてほしかったがそこは隙なく隠せるタイプの水着だった。鶴のような細頸がグルグル回される。巨きなお腹。巨きな乳房。妊婦の肩こりは宿命的なもの。それをほぐす運動の時の彼女の

たちの表情ときたら、まるで恍惚とした快感に痺れているようなのだった。我らのマドンナも例外ではなかった。長い睫を軽く閉じ、唇をうっすらとひらいてゆっくり美貌を回している。みるからに跳ねっ返りでどうかすると知の勝ちすぎたきつい印象ばかりが感じられた学生時代の悠子とは違い、やはり歳を重ねた分だけ落ち着きとしっとりとした女らしさがその魅力に加わっている。

スイミング・キャップをかぶっているのでヘアスタイルはわからなかった。以前は無造作に後で束ねたポニーテールだったが、どうだろう。量の多い、コシの強そうな黒髪で、もちろん朝シャンなど軽蔑していたわけだし手入れもほとんどしていないようなのに、枝毛ひとつなく近づくとほのかな芳香が匂ってき、助平な雄どもは陶然となってしまうのである。仕事柄、女といえども押し出しは強いほうがいいのだろう。もっとキリリとしたショートヘアにしているのかもしれない。

エクササイズの後には深呼吸だ。鼻から一杯に息を吸いこむ顔——。肉の薄い頬が丸くなる感じ。くせのない鼻の、柿の種型の鼻孔がふくらんだ。肉感的な唇が開け放たれて白い歯並びが覗けた。

大谷真実が深々と一礼して教室は終わりとなった。女たちは近くのものとしげに笑いあいながらプールサイドをシャワールームへと歩いていく。松本悠子もその中に混じり、幸福そうな笑みを浮かべ、とうとうこちらに

背を向けて物陰に隠れてしまう。

啄治は急いでブースを飛び出し、真実のインストラクターズ・ルームの鍵を開けた。自分の女の部屋の合鍵は常に持ち歩いていた。

三畳程度の広さだが小綺麗に片づけられている。デスクの引き出しからファイルを取り出した。椅子にふんぞり返り、ページをめくる。マタニティクラスの生徒たちの履歴書や健康診断カルテが収められているのだ。

啄治の腹はもう決まっていた。どんな困難を排しても松本悠子をコレクションに加えてやる。青春の蹉跎にケリをつけるとか、昔の恨みを晴らすなどといった復讐心ではなく、ただ自分の倒錯した変質的な欲望を満たすために目の前にあらわれた極上の女、理想的な獲物を一寸刻みに陵辱するのである。西田夏子や大谷真実のように手ごめにし、セックス奴隷として自分の女にする。彼女たち以上の完璧なコレクションになるのは間違いなかった。そして彼女たち以上に難しいのも明らかだ。何しろ相手は弁護士なのだ。ちょっとやそっとでは陥穽できるはずもない。ひとつのミスも許されないだろう。まず敵のすべてを洗いざらい調べ上げ、しかるのちに奸計を実行する。

啄治の瞳がキラキラと脂ぎってきた。

（お前も変わったが俺も変わったんだぜ、悠子。お前がますます女っぷりをあげたように、俺はとことん悪党

になった。すぐにたっぷりと思い知らせてやる)

啄治は松本悠子のページを見つけて食い入るように読み耽りはじめるのだった。

ファイルを読了した頃、入り口の扉に鍵が差しこまれた。大谷真実が帰ってきたのだ。啄治は音をたてずに立ち上がり、そっと扉の裏側へ身を忍ばせる。

ロックが外れ、扉が静かに開け放たれた。真実ののびやかな小麦色の肢体が部屋に入ってきて、一瞬立ちすくんだ。デスクが乱れているのに気づいたのだ。

慌ててデスクに駆けよる真実。腰を屈め、引き出しを覗いている。水着の上に白いガウンを羽織っている。帽子は取っていて濡れた黒髪が後へ撫でつけられ、素敵な額が露出している。大きな瞳をいっそうクリクリさせて散乱したデスクの上を調べている真剣な表情はまだどこか少女っぽさが抜け切らない。

「何を探しているんだ、どブス——」

啄治は扉を閉めながら姿を現わした。ギクツとして振り返った真実の腕をもぎ取るようにわし掴むとそのしなやかな身体を胸に抱き締めてしまった。

「あなた、何をしてるんですっ、人の部屋で！」

激しく藻掻きながら憎悪を瞳に弾けさせる真実は蒼白の表情だ。

「うるさい、デコ！」

と、啄治はいきなり彼女のあらわな額をビシヤリと平手打ちした。ヒッ、と首をすくめる真実。

「でかい声をだすなよ。わざわざご主人様が朝の挨拶に来てやってるんじゃないか」

そういうと啄治は彼女の尖ったあごを掴み、強引に上向かせる。ハーフのように彫りが深く、浅黒い顔が強ばる。濃い眉がキリキリと吊り上がっている。啄治の女にされて以来、どれほどの辱めを受けたかわからない真実であったが、いつも最初はイキのいい抵抗を示すのである。それに慎重な啄治は職場ではこのような行為を控えていたのでかなり驚いたに違いない。

「人を呼ぶわ。出てって！」

「生意気いうんじゃない。そんなレディみてえいな口はもっと美人がいうから絵になるんじゃないか。真っ黒い顔をしゃがって、どんなに気取ってもサマにならねえんだよ」

啄治は上向かせた彼女の顔に唇を突き出していく。

「いや——うっ……」

美人スイマーの悲鳴は強引に強制されたキスによって途絶してしまう。まったく愛情もない貪るような口づけ。振り払おうと首をあがかせる真実だが並みの女子よりも強靱なその筋力も啄治の前では赤ん坊のように軽くあしらわれてしまう。

歯だけは必死に食い縛っていたが唇を押し潰され、剥

きでた歯茎をベロベロと舐め尽くされてしまった。鼻の頭がぶつかりあって右に左によじれた。

ようやく口づけを終えると啄治は彼女の身体を回転させ、背後から抱きすくめるようにしてぴったりと頬ずりする。

「大谷の小汚ねえニキビ面の、このザラザラした触り心地、一カ月ぶりだったなあ」

体育会系の上下関係を持ちこんで啄治は真実の姓を呼び捨てにすることにしている。

「変、変態っ、やめてったら」

両手をがっちり掴まれているので身動きもできない。真実はタバコ臭い啄治に辟易としながら頬をひきつらせる。

「大谷、お前を女にしてやった有り難い先輩に、なんだ、そのふくれっ面は。ブスがますますブスになるじゃねえか」

と、啄治は囁きながらガウンの肩を肌けさせる。ストラップの食いこんだピチピチの肩が露出する。小麦色の二の腕を手で何度もさすりあげた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

謎の尾行者

女弁護士松本悠子の内偵をすすめていた啄治は奇妙な事実気づきはじめていた。

どうも彼女を尾けまわしているのは自分一人ではないようなのだ。彼女が夫婦でやっている法律事務所のビルの周辺や自宅のアパート付近に、きまって不審なライトバンが止まっているのである。ナンバーを控えて照らしあわせているから同一の車両であるのは間違いない。旧式のタイプだが窓はすべてスモークが使用され、視界を遮っている。みるからに曰く有りげな車である。

それだけではない。彼が悠子の評判を聴きにそれとなく近所の主婦らへ探りを入れると——宅急便を装って訪ね、ちょっと流し目を使ってやると彼女たちはたいいていもてあました時間の慰みの相手に彼を選び、脳天気虚実織りまぜて話すのであるが——驚いたことにこんな重要証言をいったりするのである。

『あんたも彼女にお熱なの。まったく男たちときたらなに考えて仕事してんだか。この前の宅急便のおじさんも彼女のことを聴いていったわよ。美人をみると老いも若きもすぐに昇せちゃうんだから』

もちろん確証はないのだが、ピンとくるものがあるのだ。啄治はその男があバンと関係があると睨んでい

る。

(警察だろうか)

最初に頭に浮かんでくるのは当然、菊のご紋だ。何らかの政治活動に彼女が絡んでいて事務所への出入りを当局がチェックしている可能性は高い。悠子の政治的ポジションと権力のそれは交わる部分がないのだから。もしそうだとすれば啄治の計画も中断を余儀なくされる。お互い、興味の焦点は一緒でもこっちの動機は不純そのものなのだから手が後に回ってしまう。潔く時期を改めねばなるまい。

もうひとつの可能性は怨恨を動機にした単独犯。弁護士なら人の恨みを買う場合もしばしばだろう。弱きを挫き強きを助ける、彼女の活動から考えて恨みを持つのは強きの方、たとえば老人や主婦を手玉にとる悪徳商法の経営者とか、外国労働者——つまりジャパ行きさん——を人身売買まがいに不法に拘束しているヤクザだとか、考えれば切りがないほど敵はいるに違いなかった。そっちの世界の人間が復讐目的で機会を狙っているのだとしたら、こっちの身は安心だろうが、今度は悠子の身柄が心配になってくる。手に入れる前に傷物にされるのは御免だ。なんとか方策をこうじなければならぬ。共同戦線を張るのはお断わりだから、知り合いのヤクザに頼んで手を引かせるのがいいかもしれない。

いずれにせよ、面倒な雲行きになってきたと思ってい

た頃である。解決は文字通り向こうから歩いてきたのであった。

ある日、いつものように松本法律事務所が入っているビルを眺められる位置に車を止めているとガラスをノックする男がいるのだ。中年すぎの目つきの悪い男である。しまったと思った。今日はバンの姿が見えないのでつい油断していたのだが、その男が啄治と同様、松本悠子を内偵している例の人物であるのに疑いを持たなかった。同類の持つ独特の臭いが彼には感じられた。

その男がコートのポケットから警察手帳を今にも取り出すのではないかと啄治は内心ビクついてしまう。しかし、狼狽をひた隠し、堂々とした態度で対応した。

男の名前は外原明男といった。五十二歳。無職。元刑事である。やはり松本悠子を内偵しているあのライトバンの持ち主だった。

怨恨による復讐——。

元刑事という過去に多少ビビった啄治だったが話を聞いていくうち、彼の正体がそっちの類であるのがはっきりしてきた。

「どうもあの女を窺っているのが私一人でないのに気づいたんでね」

と、外原は今日、思い切ってコンタクトしてみることにした理由をいった。

「元の職場の連中なら初対面でも匂いでなんとなく心

当たるもんなんだけどね。あんた、どうやらそっち方面の人じゃない。ひょっとしたら協力しあえる人類なんじゃないかと思ったわけだ」

ちなみにこの『人類』は元刑事の口癖のようである。

彼が松本悠子に恨みを抱いた理由は簡単である。警察を懲戒免職になった原因が彼女にあるとそう信じているからである。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

生き地獄へは回転椅子にのって

松本悠子がロッカーの前でマタニティの服を脱いでいる。紺のロングスカートだ。肩を抜き、脇のホックを外すと簡単に脱ぐことができる。マタニティ用の衣類は着脱が容易なのである。下は半袖の白いブラウス。ちょっと汗を掻いていて背中が濡れている。ずっしりと巨きなお腹がなんとも重たそうである。形は非常に綺麗で、ぞくにメロン腹といわれる体型だろうか。

そして真っ白な二肢があらわだった。ムセ返るほどに肉づきのいい太腿がぴっちりとおわさっている。人妻ら

しい色香に満ちていた。

ブラウスの下はどうやらすでに水着をつけているらしい。面倒なので自宅で着てくるのだろう。

悠子は懐妊を機に長かった髪をバツサリ切っていた。妊娠期はどうしても腺病質的になるし、髪も抜けるわけでショートの方が何かと清潔だろうと思ったのだ。髪は女の命という世間の常識には無頓着な悠子である。もちろん彼女くらいの美人ともなればどんな髪型であっても似合わないわけがない。いや、かえってこの方が彼女の知性美がより輝いてみえるといってもいいくらいであった。美しい額や肉の薄い頬が露出して素敵だし、以前は隠れていたうなじもすっきりとみえて若妻風の清楚ささえ備わっている。ますます女っぷりがあがったのだ。

とはいうものの、やはり妊婦。ブラウスのボタンを外すために俯いている彼女の頬にはひとつふたつ吹出物がみられる。ピンク色のほんの小さなものだが、法廷以外ではほとんど化粧をしない彼女の顔には目立ってもいるわけだ。夫の出張中、法律事務所を臨月間近の今まではぼ一人で切り盛りしている心労がないわけでもない。自宅は時々実家の母親が来てくれるものの、弁護士の仕事は手抜きができないのだからこの程度の肌の荒れは仕方がないだろう。だがその仕事も一段落して今週いっぱい産休である。あとは一カ月後の出産ともう一カ月先の夫の帰国を待つばかりだった。

その夫、松本高志は東南アジアへ半年以上行ったきりである。現地で起きた日系企業の犯罪について調査していた。長引いているのは会社側の妨害工作が予想以上に激しく、現地の政界官界からも睨まれているらしいのである。自分がこんな身体でなければ一緒に向うで働けるのにと、悠子はいつも残念に思うのだったが日をあけずに届く彼からの手紙には愚痴のひとつもなく体調も良さそうなので心配はしていない。誰かがやらねばならない仕事なのだし、ちょうど時期が悪かっただけである。身重の妻を一人残し、仕事に飛んでいってしまった夫を恨む気持ちなど微塵もない悠子であった。

ブラウスを脱ぎかかると、同じプレママスイミングクラスで泳いでいる妊婦たちが数人、かたまって脱衣室に入ってきた。賑やかな話し声が聴こえてくる。と同時に悠子の表情も柔和なものとなった。主婦たちは悠子を見つけると当然のようにまわりに群がり、にこやかに話し掛けてくる。この他愛のない語らいが気分転換にはすこぶるいいのであった。悠子が柄にもなくリッチなホテルのスイミングスクールに通いだしたのは時間的制約と相談した結果であるとともに、彼女たちの屈託のない明るさが気に入ったからである。いわば戦士の休息である。仕事は充実しているが憂鬱になる場合も多い。支えあう伴侶もいないとなれば、やはりどこかに逃げ場がなければたまらないだろう。日頃はこういったブチブルの洒落

た娯楽施設は敬遠する彼女であるが、緊急避難と割り切り選んだ。洗練された中流階級夫人ばかりで会話も節度を保ち、そこそこ教養が滲みでたものだった。互いに詮索しすぎず距離を保ちながらも、愉快的時間を過ごせた。週末ここへ来ると滅入っていた気分もいつのまにか晴れている。悠子はこのホテルを選んだことに満足していた。少なくとも今日までは……。

「ほんとに松本さんは立派でいらっしゃるわ。まだ働いていらっしゃるんでしょう」

一人の夫人がしみじみ言うと、まわりの若妻たちも巨きな腹を蠢かせて頷く。

「しかも弁護士なんて大変なお仕事、ただでさえ難しいのに」

彼女たちにとっても悠子の職業は興味深いらしく、露骨ではないにせよ話をそっちの方へもっていきたがる。いったいどんな事件に関わっているのか、法廷とはどういうところなのか……。

「さあ、私は民事専門ですからねえ。刑事事件なんかは派手で凄いらしいけど、こっちは案外暇ですよ」

面倒なのでこんな時には悠子は決まってそうはぐらかすようにしている。実際は刑事事件が専門なのだが、まあ、この程度の嘘は許してもらいたい。生臭い事件の話など妊婦たちの胎教にいいわけがないだろう。

「それより、清水さん、昨日男の子をお産みになった

そうよ」

悠子のガードが堅いので他の主婦が話題を変えた。いっせいに羨望と喜びの表情になる彼女たち。これこそが今の彼女たちにとって最も聴きたいニュースなのかもしれない。悠子とて例外ではなかった。この歳——三十二歳——になるまで仕事に没頭してきて妊娠を見送ってきた。別にそれで不満もなかったし、一生産まなくとも、思っていたのだが、ふとした弾みで身ごもってみるとやはり女としての実感がしだいに高まってき、今では胎内に宿る生命への思いは他の若妻たちと変わらないものとなっている。健康的な産声を聴き、この手で丸々とした玉のような赤ちゃんを抱いて、おっぱいをやれる日を楽しみにしているのである。

「あら、時間だわ」

腕時計を覗いた一人が声をあげる。立ち話にかまけていた彼女たちはバラバラと自分のロッカーの前で水着に着替えていく。悠子もニコニコしながらブラウスを肌けて水着姿になった。いつもの紺色の水着である。色白の肩や胸もとがムチムチと輝いている。マタニティ用の水着はお腹の部分ばかりでなく、バストもたっぷり余裕をもたせているのだが、悠子の乳ぶさはそれでも足りないようにパンパンにふくらんでいて、カップの部分が大きく突き出ている。スイミングスクールがない日はノーブラでいなければならないほど張っているのだ。もともと

とバストは八十八センチとボリュームたっぷりで彼女を知る検事連中は影で悠子を牝牛と呼んでいるくらいであるから、妊娠末期の今となっては九十をはるかに越える堂々の巨乳ぶりだ。こうなれば牛よりも河馬に近かるうか。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

妊婦拐引

冷静にならなければ、と悠子は自分にいいきかせた。今一番、何が重要なのかを真っ先に考えなければならぬ。啄治が残忍な笑みとともに送ってくる視線の先のこの腹部こそ、妊婦として犠牲にしてはならない宝なのであった。彼らが自分に対する復讐を企てているのであるとすれば、当然、このお腹を人質にとって屈服させようとしてくるのは明らかである。啄治の思わせぶりの視線もそれを示唆しているのだろう。まったく卑劣なやり口だが悠子としてもそうなれば観念するしかない、と苦渋に満ちた決意をきめる。彼らは本気なのだ。何年間か刑務所暮らしをする気持ちできている。下手に騒げば本当に

お腹を痛めつけてくると思われた。彼らの自分に対する怨恨は深く大きく、どのような辱めをこうむらねばならないか、想像も出来ないのだが、悠子はとりあえず死んだ気になって耐えようと悲壮な覚悟をするのだった。

噴辱に美貌を蒼白にし、キッと啄治を睨みつけていた悠子だが、その顔を横に背け、吐き捨てるようにいうのである。

「あなたがここまで落ちぶれているとは思わなかったわ……」

松本悠子の冷え冷えとした横顔。啄治は心臓が少女のように高鳴るのを自覚している。柔らかそうな耳たぶ、肌理の細かい頬肌、癖のない鼻筋の稜線、女らしいあごの骨格……こんな鮮麗なプロフィールはついぞお目にかかった記憶がない。この美女をこれから自由に陵辱できるんだと思うと胸が熱くならないわけがない。積年の思いが遂げられるのだ。

それはもちろん外原明男とて同じである。いや、彼の方が思いは強いかもしれない。松本悠子個人に対する私怨は今日、ついにその秘匿されていた願望が成就できるのである。瞳が充血するような昂奮を覚えないわけがないのだった。

外原は女弁護士のねじ曲げられたうなじを凝視している。妖しく首の筋肉がよじれ生々しいまでの色香が網膜を滲ませる。バスローブの襟に隠れるまでの首筋の硬質

的な綺麗さはどうだろう。とても妊娠中とは思えない女っぷりなのだ。一刻も早く松本悠子の全貌をこの目にしたい。

外原は狂おしい視線を啄治に送った。啄治も一応、ニヤついてはいるものの彼女に本心を気とられないための虚勢であるのは明瞭だ。この女の半裸体を前にして冷静でいられる男などいない。

「お悠！ 覚悟はいいな！ 丸裸で詫びるんだ！」

啄治はどうしても犯しがたい、自制を促してくる妊婦という神聖な事実を打ち消すように怒声を張り上げた。

「さっさとおやりなさい。だけど恥を知るのはあなたたちの方だわ。自分がどんな醜いことをやっているのか、いずれ責め苛まれるときがくるのよ」

「うるせい！ つべこべいわずにデカパイもマン毛も晒しやがれ！」

毅然として言い放つ悠子の神々しさに一瞬たじろぎながらも、啄治は荒々しく白いバスローヴのウエスト部分で結び目を作っている紐に手をかけた。外原はがっしりと背後から彼女の両肩を押さえる。

あごを突き出すようにして憤怒の表情をあらわにする悠子。弱々しさの欠けらも感じられない。

「いい度胸だ、お悠！」

啄治はスルリと結び目をほどいた。何ら手を下さなくともそれだけでバスローヴは左右へ肌けていく。紺色の

水着を張りつめさせている巨きなお腹がズンとあらわになった。それに乗っかるような双乳も見事にふくらんでいる。胸もとのなまめかしいまでの白さとともに男たちは息苦しい色気を感じずにはいられない。

「醜いのはお前の身体じゃないかっ、ヘッポコ女弁護士！」

と外原がどやしつけ、バスローブの肩を外しにかかる。

反射的に腕を胸の前に縮かめた悠子だったがすぐに力を抜いた。いまさら抵抗するのは惨めなだけだ。

双肩が露出する。むっちりと年増の肉がついた肩である。水着のストラップが食いこむ乳白色の丸み。噛みついて歯型をつけたくなる衝動を覚えた。早くも男たちの鼻息が荒くなる。両肩の次は二の腕だ。ぴっちり閉じられている腋の下にほんの少し贅肉がついてる感じだがちっとも不快ではないのが不思議である。そのくらいボリュームがあるほうが熟れた印象を与えるのだろう。

以下は有料本編でお読みください。

#####